

特集にあたって

茂木恒俊, 児玉和彦, 杉山由加里

1 こどもを見守る“一歩進んだ”診療へ

今回は「こどもの診かた Next Step! ~地域で健康・成長を見守る医師になる~」というタイトルで特集を組みました。今までの小児に関する特集というと、救急対応や薬の使い方、ホームケアなどに焦点をあてたものが多かったのではないのでしょうか？確かにこれらに関する知識は大切であり、はじめて救急外来などで小児診療に携わる医師としては不安な領域であるため関心も高いです。しかし、実際には多くのこどもたちはそれぞれの地域でちょっと調子が悪いときに身近な医師に相談をしたり、地域の保健師などに成長・発達に関して相談をしながら元気に生活をしています。総合診療に携わる医師としては疾患に罹患しているこどもへの対応だけではなく、健康で元気なこどもが健康で元気な状態で日常生活を送ることができるように予防医療や健康増進、育児支援などを包括的に担っていくことでこどもを見守っていく必要があります。そこで本特集では初期対応などの不安より診察に慣れてきた頃に生じるこうした“こどもを見守る”といった視点での悩みに焦点をあてました。

2 総合診療専門医に求められる“こどもの診かた”

この特集を編集している頃、2015年4月20日に日本専門医機構 総合診療専門医に関する委員会から総合診療専門医の6つのコアコンピテンシーが発表されました。その内容は次の通りです。

- | | |
|---------------|--------------|
| ① 人間中心の医療・ケア | ④ 地域志向アプローチ |
| ② 包括的統合アプローチ | ⑤ 公益に資する職業規範 |
| ③ 連携重視のマネジメント | ⑥ 診療の場の多様性 |

今回の特集に関する小児分野を詳しく見てみると、その“個別目標”のなかには「患者のライフコースに沿って**予防・健康増進**を含めた医療・ケアを提供できる」や「**地域の保健・医療・**

介護・福祉に関する事業や社会資源・サービスの実態と特徴（長所・問題点）を理解し、評価できる」などがあげられており、また“経験目標”では「発達障害（自閉症スペクトラム、学習障害、ダウン症、精神遅滞）」や「小児虐待の評価」などが取り上げられています。このように小児科分野における幅広い知識と経験が求められています。

現在の総合診療医の小児科研修は、病棟における器質的疾患の研修が主となっており、予防医療や地域保健、発達障害や虐待などについて十分な研修がなされているとは言えません。しかし、家族も地域もみる総合診療医だからこその視点が、こどもの健康を守るときに役立つことがあります。疾患だけではなく、広い視野に立ってこどもをみるときに総合診療医がこどもをみることのメリットがあるのではないのでしょうか。

3 幅広い知識と経験を得るために

今回の特集の目次を見ていただきたいと思います。前述した総合診療医が知っておくべき目標を十分に対応できるような項目となりました。

こどもの予防医療の根幹をなす予防接種については、乳幼児・幼児期と学童期・思春期に分けてそれぞれ具体的にわかりやすく記述をしていただきました。

発達障害は一般小児人口の約6%に存在すると言われ、気管支喘息とほぼ同等の頻度をもつコモンディージーズです。それと同時に、乳幼児期の発達について十分な研修を受けていないことが多い総合診療医にとっては数居が高い疾患です。本特集では、総合診療医がどのような問診をとり、どうやって困っている家族を医療につなげるかを提案しています。

さらに、発達障害は小児虐待を受けるリスクファクターでもあります。小児虐待は5%が死亡する致死性の疾患です。本特集では、虐待を疑う徴候の見分け方や、その後の報告について詳述していただいています。

そのほか、普段何気なく目にしている母子手帳には、生まれてから小学校に就学するまでの育児・保健にまつわる情報だけではなく、妊娠中の経過や出産の状態など多くの情報が含まれています。また、事故予防・調乳法・離乳食の進め方・歯みがきの方法なども記載されており、われわれにとっても教科書と言っても過言ではありません。そこで日常診療での母子手帳の使い方についてもご解説いただいています。

また以前から話題になっているアレルギー（アトピー性皮膚炎・食物アレルギー）とその対応についても触れることで、正しいアレルギー診療に対する知識を身につけてもらい、食物アレルギーに関する知識やアナフィラキシーのときの初期対応など地域コミュニティでの啓蒙活動に役立てていただきたいと思います。

なお、それぞれの項目に関してDO（すべきこと）とDONOT（してはいけないこと）をまとめました（p.346参照）。時間がなくても、各項目のポイントがつかめるように工夫はしていますが、どの項目も秀逸ですのでぜひともすべての内容に目を通していただきたいと思います。そして総合診療医がこどもをみるのがこどもの幸せにつながるように研鑽し続けなが

ら、省察し学び続けることこそが総合診療医の醍醐味であると期待しています。
今回の特集が皆さまの今日からの診療に少しでも役に立てれば嬉しい限りです。

プロフィール

茂木恒俊 *Tsunetoshi Mogi*

京都大学大学院医学研究科 医学教育推進センター
一般社団法人こどものみかた 理事

2008年から開発してきた小児科を専門としない医療者のためのプログラム「小児救急初期診療プログラム（通称、小児T&A：Triage & Action）」を現在は京都大学にて医学教育学の視点からブラッシュアップしています。2015年には4年ぶりの改訂をして、より学びの深いプログラムに成長しています。今年も年間14回プログラムを開催する予定ですので、詳細に関しては<http://kodomonomikata.luna.weblife.me/>をご覧ください。
このプログラムを通じて、多くの医療者がストレスなく、楽しく安全にこどもと接することができるように努力していきたいと思えます。

児玉和彦 *Kazuhiko Kodama*

医療法人明雅会 こだま小児科 理事長
一般社団法人こどものみかた 理事

京都大学医学部卒業、神戸市立医療センター中央市民病院内科、亀田総合病院家庭医診療科、耳原総合病院小児科などを経て現職。
家庭医療専門医・小児科専門医。あらゆる患者のあらゆる訴えに応えられる外来のスペシャリストをめざして修行中。HAPPY（こどもの病歴と身体診察を学ぶワークショップ）主宰。小児医療に携わる者の仕事は「こどもを通して未来を明るくすること」だと信じています。ともに学びましょう！

杉山由加里 *Yukari Sugiyama*

みなと医療生活協同組合 協立総合病院 小児科

2003年 福井大学医学部卒業、日本小児科学会専門医。

2015年3月に家庭医療学後期研修プログラムを修了したばかりです。

昨年、自施設ではじめて小児T&Aコースを開催しました。さまざまな施設の医師・看護師が膝を突き合わせて学び、また、それぞれの視点があることを確認できました。地域や施設の形態、職種や立場が違っても「目の前のこどもに元気でいてほしい」という思いは同じと信じ、学びの場づくりに貢献していきたいと思えます。